

この白根にとしぞくれぬる  
歳 旦

名にたかき雪の白山明けて今朝  
春の光りにむかふ長閑さ

天神奉納和歌

いづくとも家路定めぬ身の行衛

天満神もあはれとぞ見よ

遊行五十四代 他 阿

○遊行上人念佛札傳話

續咄隨筆に云ふ。金澤藩士横山求馬の家人高桑喜三右衛門と云ふ者、若き時は殺生人にて、至つて律儀なる者也。七十七歳に及び、惣領の男子は惣太夫と云ひ、次男は喜右衛門とて若黨奉公しけり。前々より渡部安兵衛方へ出入す。或時安兵衛が次男甚右衛門川狩に行き、歸りに喜三右衛門方へ立寄る。對話の内酒肴をもてなし、喜三右衛門いふやう、此年に及べども縁なく、遊行上人の札を貰はず候。彼札は尊き事多く、甚残念なるよしを語る。甚右衛門我幸ひ懐中にも所持し、宅にもあり。可遣とて懐中の分を取り出し、先

づ是を可遣とて與へけり。忝しとて戴き、持佛堂へ入れ、追て被下分はかゝにとらせ候べしとて悦びけり。さて甚右衛門は歸りたり。喜右衛門は渡部安兵衛若黨となし、江戸へ召連れ行くとて念頃に召仕ひ、父母とも悦び、安兵衛が留守へも禮にも参り度思ふ折から、寛延三年冬大雪降り、老足途中難叶、春に至りても深雪にて延引の處、喜三右衛門が妻二三日煩ひ、二月朔日に六十八歳にて死去しけり。然る處喜三右衛門も愁歎甚敷、毫氣のやうにて同月九日に是も死去しけり。十日の夜渡部甚右衛門用事有りて、堀久右衛門方へ罷越し、夜半頃歸りける處、田町西光寺の前なる橋を越え、吾が宅の方町屋の前に喜三右衛門の恰好なる者居りけり。能く似たる者哉と思ひ、宅の方へ來る處に、立ちて川上の方へ行く。甚右衛門は吾が家へ歸り、臥所へ入りけれども尙心元なく、又門を明け出で見ければ、毛利瀧右衛門舊宅の方へ行く体なるゆゑ、押詰可見届と指急ぎ行きけるに、見失ひける故立歸り打臥す。其の後小用に起き、玄關の戸を明け候へば、其の前に高桑喜三右衛門露踞り居たり。甚右衛門聲をあげ、喜三右衛門かゝと二聲呼

びければ、其の時是をかゝに御とらせ下され候へとて、綿帽子のやうなる物を甚右衛門に打付けて消え失せけり。右呼ばりたる聲に驚きて、家内の者燈火を持ちゆき見れば、甚右衛門は玄關の上に腰を掛け居て、此の側に綿帽子のやうなる物はなきか。かやうの趣なりとて、前後の始末がらを一々語りけるゆゑ、燈火にて其邊りを見れば、去年喜三右衛門へとらせ置きたる遊行上人の札あり。扱は去年此札をとらせける時、宅にある分も被下候はゞ、かゝにとらせ候べしと喜三右衛門云ひける處、其の後遺す事延引せし内、夫婦共死去しけり。右札の催促に來りたるもの也とて、翌朝惣太夫を呼び寄せ、右の首尾を語り聞かせ、則右遊行札と去年可遣と約束しける札と二枚共遣候間、一枚は母が分一枚は父が分なり。それゝ墓所へ納め候へとて與へけりとぞ。

○玖眞山遍照寺跡

國泰寺の横、玉泉寺の向うなる地也。當寺は眞言宗にて、高野山遍明院覺雄の開基也。貞享二年の由來書に、元和六年利常卿の御局、高野山遍明院覺雄の旅宿として、當地金澤に一

宇建立致し度旨被申上、鈴木主馬上、屋敷・家共に被下、其後泉野へ移轉被仰付。と見ゆ、遍照寺因由記には、利常卿御局玖眞院、覺雄出家子様成、毎年當地下向。因茲爲旅宿一字建立被成度旨、田井口小姓町鈴木主馬上、屋敷在之家共被下。則當寺是也。其砌寺號無之里坊云、交々留守居、山、被指越、其後圭岳住山、内、當分里坊留守居下、居住之内、且那出來、何、留被申住持、成、玖眞山遍照寺、名、秀岳口説也。此地拜領元和六年也。其後寛永十三年、今所移轉、替地泉野三百三十三步拜領云々、とあり。その巨細は小姓町の條に記載す。右遍明院覺雄は、利常卿未だ幼少にましませし時、乳母小松にて覺雄へ相せしめける處、末子なれど惣領と成り大名の相あり、能く養育すべしと云ひけるにより、覺雄より守護札を申請ける處、遂に利長卿の世子と成り、加越能三州の藩主と成り給へり。右乳人は後局と成り、玖眞院と號し、當寺開基檀那なり。小寺なりといへども、甚だ由縁ある寺なりしかど、明治五年二月堂宇を毀ち、寺地を賣却して、大乘寺坂の麓へ移轉し、僅々たる小庵を建て爰に居したる處、同廿二年十月永續の目途なきに依つ